

「鎌倉の四季」 遠藤 けんじ

段葛森の淑気が海へ出る

せせらぎを芽吹き声と聴きすます

俳諧の顔して虚子忌に紛れ込む

八景に木の芽ひかりの陽あまねし

谷戸谷戸の流れ出合ひて春の水

大権現法鼓とよもす芽吹山

頼朝公へ万の献灯花満天星

常磐御前の紅涙赤きまんさくは

荏柄天神朱塗り新たに梅は実に

楼門は古り雲の峰新しく

大拙の墓から蜥蜴瑠璃びかり

天神の梅天神の庭に干す

安養院つつじ腐しの雨つづく

菩提樹の花の仏法蜂集ふ

さんご樹の実よ八月の暗き赤

台風のどの切通し攻め来るや

法師蟬鳴け鳴け比企の墓濡らせ

海蝕洞秋思の闇の奥へ奥へ

土牢の闇から出でて水の秋

化粧坂紅葉明かりが美女つくる

法師蟬の高音や三浦滅びの地

千草咲く御堂移築の跡にして

鷺歩む深さに澄めり田越川

参道の長さ吹雪をゆく長さ

まわり堂冬陽を低く廻すなり

大銀杏誰はばからぬ裸形かな

谷戸に出て谷戸を出でざる寒九の陽

冬麗や墓向きあひて虚子立子

時宗の英断冷ゆる元使塚

百日紅幹の怪奇も芽吹き前